

# 明治の写本

今 野 真 二

要旨 江戸期に出版された版本が明治期に書写されたものを「明治の写本」と呼ぶことにする。そうした明治の写本は文学研究においては、採りあげられることはほとんどない。しかし、実際はそうしたものがあつた程度のひろがりをもつて存在していることが推測される。本稿では、稿者が所持する明治十九年に写された『夢想兵衛胡蝶物語』（文化七年刊）を分析対象とした。版本と写本との対照によつて、さまざまな言語事象についての知見を得ることができた。写本の振仮名においては、版本の語形の短呼形を振仮名として施している例が少なからずあり、当該時期に長音形／短呼形に「揺れ」が生じていた可能性がある。

キーワード…版本、写本、語形の「揺れ」

## 一 写本と版本

標題及び節題に「写本」という表現を使い、節題にはさらに「版本」という表現を使った。「写本」は「写した本」であり、写すものとなる本、すなわち「書写原本」が存在することになる。「版本」というまでもなく、広義では（版

を使って）出版された本をさす。

言語を文字化する手段という観点からいえば、（ある時期までの日本においては）「手で書く」か「印刷する」ということを考えればよい。「手で書く」すなわち「手書」の中には、何かを写すということが含まれる。また「印刷する」の中には「活字印刷」とそうではない、例えば「製版印刷」などに分かれる。

日本においては、百万塔陀羅尼に入れられた経を初めとする、宗教的な印刷物を別とすれば、文字化の手段は「手で書く」が先行し、「印刷する」が後発したとみることができる。「印刷する」がひろく行なわれるようになって、「手で書く」は継続している。現代では「手で書く」機会はかなり減っているように思われるが、それでも「手で書く」という文字化の手段は続いているし、これからも継続していく可能性はたかいだろう。

過去の日本語の観察ということからは、「写本」と「版本」との対照によって何らかの知見を引き出すという方法がこれまでも採られてきている。日本においては、慶長・元和頃に「古活字版」と呼ばれる、活字による印刷が行なわれた。そして「製版印刷」が主流となっていくという「流れ」がある。江戸期は「製版印刷」がさかんに行なわれるが、明治期になって、「活字印刷」が主流となる。

「古活字版」がつくられた慶長・元和頃は、古代語から近代語への移行期にあたっており、「手で書かれた」テキストが「古活字版」として印刷されるにあたって、あるいは「古活字版」をもとにして「製版本」が印刷されるにあたって、言語の「揺れ」が観察されることがあった。「揺れ」は「手で書かれた」テキストが古代語の様相、残照を示しているのに対して、「印刷された」テキストが近代語の様相、萌芽を示すというかたちで観察されることが多い。抄物や御伽草子における写本と古活字版との対照はそうした「揺れ」の観察にふさわしい文献資料群といえよう。御伽草子に関しては、稿者も『文献から読み解く日本語の歴史「鳥瞰虫瞰」』（二〇〇五年、笠間書院刊）の中で、『横笛滝口の草子』を分析対象として、いささかの考えを示した。

日本語の歴史を記述するという目的、あるいは過去の日本語のありかたを探るという目的のためには、言語の移行期（と思われる時期）に成立したテキストに注目することは当然のことといえる。しかし、言語を文字化するということを明らかにすることを目的とするのであれば、「手で書かれたテキスト」が印刷されるとどうなって、「印刷されたテキスト」を「手で書く（書き写す）」とどうなるか、ということの双方を視野に入れておく必要があると考える。そうはいっても、「文字化の手段」のみ、すなわち「手で書くこと」「印刷すること」のみを話題にすることは難しいのであって、結局は「日本語の歴史を記述する」という枠組みの中で、「文字化の手段」について考えることが自然であろうし、それでよいと稿者は考える<sup>1</sup>が、幾分なりとも、「文字化の手段」寄りに焦点を置いた観察や分析は試みておく必要がある。本稿はそうした考えのもとに、「明治期の写本」を採りあげてみたい。

## 二 資料について

莊子の胡蝶の夢になぞらえ、登場人物である夢想兵衛の夢物語として語られる遍歴体の寓話小説とでもいうべき読本作品に、曲亭馬琴『夢想兵衛胡蝶物語』（文化七・一八一〇年刊、前編五卷・後編四卷）がある。

稿者は、この前編五卷の写本を所持している。卷之一の末尾には「明治十九年丙戌九月吉日写之」、卷之二及び卷之三の末尾には「明治十九年丙戌十月吉日写之」、卷之四の末尾には「明治十九年丙戌九月吉日写之」、卷之五の末尾には「明治十九年丙戌九月吉日写之」と記されている。この卷之五の末尾の識語は、他の卷の識語と明らかに筆致が異なる。また「本文」の筆致は総体としてみると似寄っているようにみえるが、細部には異なりがあつて、やはり卷之五のみ「小林」なる人物が書いたものと思われる。他の卷は「土田」なる人物が書いたものとみるのが自然であろう。識語によれば、五巻とも明治十九（一八八六）年に写されたものということになるが、卷一・四が九月に土田氏によって、卷五も九月に、これは小林氏によって写され、卷二・三は土田氏によって十月

に写されていることになり、巻の順と書写の順とが一致しない。この写本には、これ以外には、書写に関する「情報」は記されていないが、あるいは貸本になっている版本を写したというようなことがあるのだろうか。この点については想像の域をでない。

### 三 本稿の目的

前節で整理したように、本稿が分析対象とするのは、明治十九年に写された『夢想兵衛胡蝶物語』の写本である。以下、この分析対象とする明治十九年に写されたテキストを単に写本と呼ぶことがある。巻之一の冒頭には「胡蝶

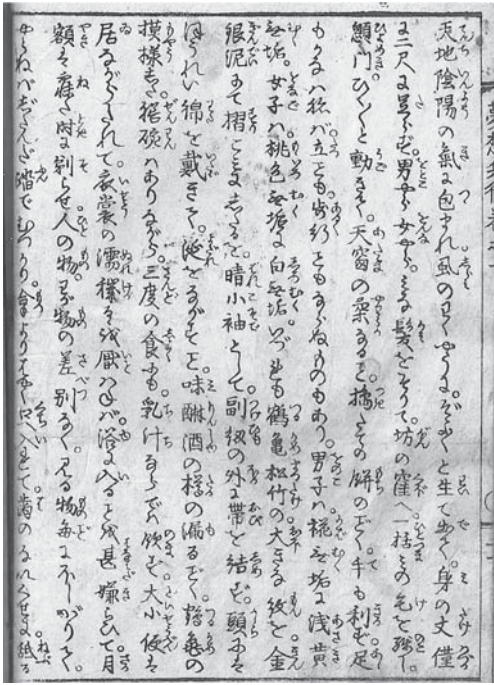


図1 版本『夢想兵衛胡蝶物語』巻1

物語自叙」とあって、その末尾には「文化六年己巳六月 曲亭主人識」とある。これは文化七年に刊行された版本（以下これを単に版本と呼ぶことがある）にみられるもので、このことをもって、写本は版本を写したものとみて、行論を進める。他にも本文を対照すると、版本の文字遣いをかなりな程度まで受け継いでいることが窺われる。仮名にどのような異体仮名をあててるか、ということは明治十九年の時点においては、さほど意識されてはいなかったと思われるが、異体仮名の使用もおおむね版本に従っている。

図1は版本巻之一の十一丁裏、図2は写本の、それにほぼ該当する箇所である。版本四行目の「足／もかなはねば」の「ね」にはいささか変わった字形があらわれているが、写本も同じような字形をあてている。また版本一行目の「僅」の振仮名は「へハ」づか」とあるが、写本は「ハズカ」とある。かなづかいの異なりがあるが、「ワ」と発音していたと思われる「ワ」に、両テキストともに「ハ」をあてている。これらのことは、写本が版本を写した

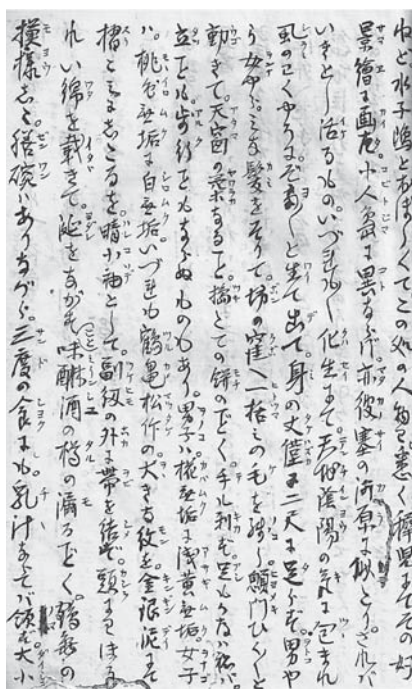


図2 写本『夢想兵衛胡蝶物語』巻1

〆る。推さりのくもひ多れ奉る。鼻よりけ。親のい人正とて。も  
 と天晴を筆文盲よりそあげて。庭子トやとく人あり。肩で  
 風をさるりの。おるの時に役より。新糸より。あはれ。さく  
 てもせん。主人も今。推初と。扶持くも。そく  
 役より。ぬち。と罵る。大さ。物習。こ。習り。

図3

型せ。と。花びと。推さりのくもひ多れ奉る。鼻よりけ。親のい人正とて。も  
 庭子トやとく人あり。肩で風をさるりの。まさうの  
 新糸より。あはれ。さく

図4

ものであることを示していると考える。あるいは版本の「嗜（たし）みて」（十七才四行目）の振仮名は「たしな」とあるべきかと思われるが、こうした箇所が写本にも「嗜（タシ）みて」とあることなど右のようなみかたを裏付けるものといえよう。（以下、引用にあたって、振仮名は、それが施されている漢字列の後ろに丸括弧に入れて示す）

また図4では「したてあげられても。」に続いていったん「新参にきつてまはされ歯を切て」と書きそれを抹消



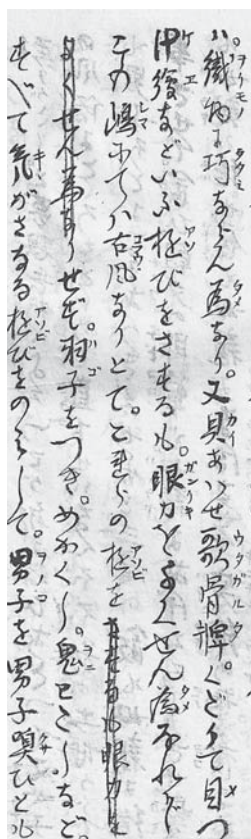


図6

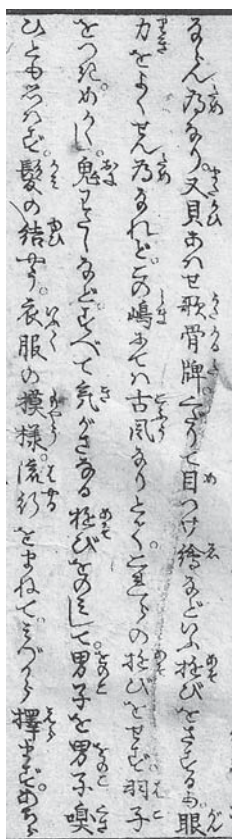


図5

して「庭子じやとて人もゆるし。」と書いているが、これは図3の二行目、版本の「したてあげられても」を書いた後に、先の隣の行の「新参にきつてまはされ」以下を写してしまったと思われる。「目移り」と呼ばれることのある現象だが、これも写本が版本を写していることを示していると考えることができる。

図6では、前の行に「目移り」がしてしまっている。

本稿は、版本を写した写本によって、文字化ということを考えることを目的としている。版本が刊行されたのが文化七（一八一〇）年で、書写されたのが明治十九（一八八六）年であるので、刊行時と書写時には七十六年の

隔たりがある。大枠でいえば、版本刊行時も、写本書写時も近代語の時期であることになるが、江戸期と明治期という違いはある。そのことがどのように「文字化」に「反照」しているかということが考察したいことからの一つであり、さらに、可能な限り「文字化」ということそれ自体についても考察を試みたい。

版本を写した写本は、文学研究では顧みられることはなかったと思われるし、言語研究においても、積極的にそのような写本が分析対象となったことはなかったのではないだろうか。そうした意味合いにおいて、本稿は新しい試みをしていることになる。

## 四 版本と写本との対照

### 四―一 平仮名と片仮名と

版本は漢字平仮名交じりで書かれ、ほとんどの漢字には平仮名で振仮名を施している。しかし、写本においては、片仮名で振仮名を施している。版本の表記体は「漢字平仮名交じり＋平仮名振仮名」と表現することができるが、これは結局は「漢字平仮名交じり」という表記体の中に包摂することができるので、そうした表記体を選択しているとみることができる。一方、写本の表記体は「漢字平仮名交じり＋片仮名振仮名」ということになり、これは「漢字平仮名交じり」という表記体の中に包摂できない。

この「漢字平仮名交じり＋片仮名振仮名」という表記体は、明治期の文献においては珍しいものではないので、そのことについての言説をあまり目にしない。しかし、仮名として平仮名と片仮名とを使うということには注目するべきであろうし、片仮名を振仮名に限定して使うということになれば、振仮名がいわば「特別視」されているという可能性も考えなければならない。一つの問題提起として述べておくことにするが、このような「漢字平仮名交じり＋片仮名振仮名」という表記体においては、振仮名が特別なものとみなされていた可能性があろう。「特別な



もの」がどのような次元において「特別なもの」であるのかということをは明らめることは今後の課題としたいが、そこには「漢字に施す」という「感覚」が発生している可能性もある。

「疆（かぎり）ある生（せい）を天地（てんち）に稟（うけ）て」（版本巻之一、五丁表四行目）を例にする。このように書かれていた場合、和語「カギリ」を文字化するにあたって、漢字「疆」を使った、というのが稿者のみかたである。書き手が選択したのが「カギリ」という和語で、それを文字化するにあたって、漢字を使うことを選択し、次に具体的な漢字として「疆」字を選択した、とみる。書き手が選択した語が「カギリ」で、それは振仮名として現われているから、「振仮名が本文である」ということもできる。漢字列は後から選択されるのであって、語を選択するより前に漢字列のみを選択することは通常は考えられない。したがって、特殊な事情がある場合を除いては、振仮名を「漢字のよみ」とみることはしない。

先に振仮名を「漢字に施すという感覚」と表現したのは、この、振仮名を「漢字のよみとみる」感覚である。この場合、「漢字が先にある」ことになる。『夢想兵衛胡蝶物語』のように、ほとんどの漢字に振仮名が施されているテキストを写する場合に、どのタイミングで振仮名を写すか、ということがある。ある程度のまとまりごとに振仮名を施すということは（想像に過ぎないが）実際のなやりかたに思われる。そうであるとすれば、そうした写し方をした場合には、「漢字が先にある」という状況が生まれることになる。

版本の「密夫（まをとこ）の扱金（あつかひきん）」（巻之一、六丁裏二行目）（以下、巻之一の場合、表示を省く）は写本にも「密夫（ママトコ）の扱金（アツカイキン）」とあるが、「ママトコ」は「ミツフ」を抹消した上に書かれている。あるいは版本の「一期（いちご）は有（たもち）がたし」（五丁表十一行目）は写本にも最終的には「一期（イチゴ）は有（タモチ）がたし」とあるが、「タモチ」は「アル」を抹消した傍に書かれている。「がたし」に続く語形としても「アル」はふさわしくない。このような例は少なからず見出す事ができ、そのことからすれば、

当該写本においては（と限定をつけておくが）、どの程度のまとまりを書いてから振仮名を施していたかまではわからないけれども、漢字列を書いてしまってから、振仮名を施すことがあった、と推測できる。「がたし」は「た」にも濁点を施して、それを消したようにみえ、あるいは濁点も振仮名と同様、後から施している可能性がある。

振仮名を後に施すとすれば、丁寧な作業としては、一つ一つの振仮名を書写原本で確認しながらということが当然考えられる。しかし、「後から写す」ということは、まずは作業手順であろうが、「先に写す」「後に写す」ということを、より「深刻に」考えれば、重要だから「先に写す」、附属的な要素だから「後に写す」という「感覚」を発生させていないかどうか。「附属的な要素」という表現を採ったが、「選択的な要素」と表現しなおしたらどうであろうか。選択的ということは「あってもなくてもいい」ということになる。「本文」が「あってもなくてもいい」ことにはならないとすれば、振仮名は「本文」ではないことになる。

そのような「感覚」があったとすれば、それはいつ頃から発生したものか、ということを明らかにすることが次なる課題となる。それはそれとして、明治期の「総振仮名」という表記体は、手間という点においては、たいへんな手間であることはいくまでもなく、それが「書き手」と「振仮名の施し手」とを實際上分離してしまい、最終的にはそうした「分離」が、「振仮名は選択的（オプショナル）」という「感覚」、「心性」をうみだすということがあったのではないだろうか。そう考えると、例えば夏目漱石が、自身の作品が「総振仮名」で朝日新聞に発表されることを十分に知りながら、原稿は「総振仮名」で仕上げていないことも説明できる。あるいは、テキストの印刷に際して、テキストの「書き手」ではなく、編集の場や印刷の場で、振仮名が「書き手」以外の人物によって施されるということも、実際そうするしかなかったということを超えて、それを認める「心性」があったということになる。こうしたことについては、ここでは問題提起にとどめ、今後、さまざまなテキストの具体的な様相を観察してさらに精密に考えていくこととしたい。

#### 四―二 どのように写していたか

写本と版本とを対照することによって、どのように写していたかが推測できることがある。版本に「樹(き)に攀(のぼ)るとき。猿猴(さる)のごとく。水(みづ)を戯(おも)ぐとき河童(かつば)のごとく。草(くさ)に隠(かく)るゝとき兎(うさぎ)のごとく。浴(ゆあみ)するとき鳥(からす)に似(に)たり。」(十五ウ)という行りがある。この最後の箇所、写本には「浴(ユアミ)するとき鳥(カラス)ゆづとくに似(ニ)たり。」と書かれている。これは「ゝのごとく」という表現が続いたので、はずみで「鳥のごとく」と書いてしまい、それから版本をみて、すぐに訂正をしたものと思われる。このように、「書写原本」である版本を読みながら、すなわち音声化しながら、かつ文の展開を予測しながら書いている場合があることがわかる。

あるいは版本の「寐(ね)かしておけば」(十二オ三行目)の箇所、写本には「寐せかしておけば」とある。これもはずみで「寐せ」と書いてから版本のかたちに修正したものと思われる。版本の「く、ますれば」(十二オ五行目)の箇所を写本が「くくませてすれば」と書いているのも、いったんは「くくませて」と(はずみで)書いてしまつてから、修正をしたものであろう。「じれつたさ」(十三オ一行目)を写本は「じゆれつたさ」と書いている。これは「ジレッタサ」と音声化したものを文字化するに際して、「ラ行音+促音」を逆に「促音+ラ行音」のかたちで書いてしまったものと推測する。版本の「世(よ)の中(なか)は」(十四オ四行目)を写本は「世中(ヨノナカ)は」と書いている。これはまず「ヨノナカハ」と音声化し、それを「世中は」と書いたものと思われ、語、もしくはそれよりも少し大きな単位を音声化してそれを文字化する場合があったと思われる。版本の「おほくは」(十六ウ三行目)を写本が「お、くは」と写しているのも同様であらう。

版本の「糸(いと)をつけたれば」(十ウ六行目)を写本は「糸(イトヲ)つけたれば」と書いている。この箇所では、助詞「ヲ」を脱落させて写したことに、振仮名をつける時に気付いて、振仮名に脱落させた助詞「ヲ」を

含めたと思われる。何行かを写してから、版本をみないで振仮名をつける、というような写し方はしていないことがわかる。しかし、その一方で、版本と写本との振仮名の異なりは相当数あって、版本の振仮名をそのまま写していたわけではなく、写し手が自身のいわば「感覚／判断」で振仮名を施している箇所が少なくないことが窺われる。

「後妻（のちぞひ）」（二十六オ八行目）は、「ノチゾヒ／ノチゾイ」という語を書くにあたって、「後妻」という漢字列を使ったとみるのが自然で、「ノチゾヒ／ノチゾイ」という語を選択してから、書き方を決めたという「順序」がある。しかし、書写に際して、この振仮名が写本のように「後妻（ゴサイ）」と変わってしまったえば、選択された語が「ゴサイ」であったことになり、本文が変わったことになる。「本文が変わる」ととらえれば、それは大きなことであることになる。しかし、それが当該時期においては、「それでもよい」あるいは「本文は変わらない」ととらえられているのだとすれば、広義の「本文」は漢字列であることになる。語を（仮名ではなく）漢字で書くことに「公性」を求める「心性」は、ついには、漢字で書かれたかたちを「本文」とみるという「心性」をうみだす可能性もある。このことからについては、さらに考えていきたい。

版本の「乳汁（ちち）」ならでは「（十一ウ八行目）を写本は「乳汁（チ、）ならてば」と写している。このことからすれば、「ナラデワ」を書くにあたって、「ならでは」と書いているのではなく、「ならては」と書いてから濁点を附けていると思われる、その際に、濁点を附ける位置を誤った例と推測する。「なら」と書いて、次に「で」と書くのであれば、濁点が「は」に附くことはない。そうであるとすれば、「濁音仮名」「で」があるのではなく、「て」に濁音を附ける」という「感覚」があったことになる。「後からつける」のだから、濁点は「選択的（オプショナル）」なものであることになる。

## 四―三 本文の異なり

振仮名の異同については次節で採りあげることにして、それ以外の異同について「本文の異なり」とみなし、本節で扱うことにする。版本と写本との「本文」の異なりにはさまざまなものがみられる。ここでは、その幾つかを採りあげる。

版本の「まづい物（もの）はなし」（五ウ一行目）が写本においては「まづい物（モノ）なし」と書かれている。ここでは助詞「ハ」が脱落している。「線香（せんかう）を食（くら）ふ」（十六オ九行目）は「線香（センカウ）食（クラ）ふ」と写されていて、ここでは助詞「ヲ」が脱落している。「数百字（すひやくじ）を習（なら）ひ」（十八オ二行目）も「数百字（スヒヤクヂ）習（ナラ）ひ」と写されており、ここでも助詞「ヲ」が脱落している。

このような、助詞「ハ」「ヲ」の脱落を、単なる誤写、つまり不注意による写し損ないとみることはもちろんできる。こうしたことがらについては、拙書『文献から読み解く日本語の歴史「鳥瞰虫瞰」』（二〇〇五年、笠間書院刊）において述べた。そこで述べたように、十六世紀頃には、古典語（つまりは古代語）においては格助詞を使わなかった主格や対格に格助詞を使うことが常態（にちかい状況）になっていたとすれば、助詞「ヲ」を脱落させた写本は、書写原本を「とびこえて」古い形式を示したことになる。なぜそのようなことが起こるのか。

金水敏は、結局「を」付き目的語と無助詞目的語との違いは、格システムの決定的な変化とは言えないことが分かる。平安時代から現代まで、無助詞名詞句による主語・目的語の表示は潜在的に（おそらく大部分の方言で）可能であったと仮定できる」（二〇一一年、岩波書店刊、シリーズ日本語史3『文法史』一一〇頁）と述べる。最初の観察としては当然のこととはいえ、これまでの歴史的な観点からの日本語の観察は、目にみえる形式がどのように変化しているかということにややとらわれてきていたようにも思われる。「目にみえる形式」の推移を正確に把握できなければ、「その先」はないが、それが正確に把握できたとすれば、その背後にある／あった言語の



システムも「目にみえる形式」と同じように変化し、推移しているのかを見極める必要が当然ある。金水敏は、「無助詞名詞句による主語・目的語の表示」に関して、「目にみえる形式」はおおむね「無助詞↓助詞使用」に推移しているようにみえるが、背後にある「格システム」は変わらないということを指摘しており、その指摘は貴重なものと考ええる。稿者の表現を使えば、このことからは「いついかなる時でも起こり得る」言語現象であったことになる。

写本は表音的表記を露出させることが少なくない。版本はかなり濁点を使用しているが、それでもすべての濁点音節に濁点が附されているわけではない。版本に附されていない濁点を写本が附することは少なくない。版本の「そなたは」（八オ二行目）を写本が「そなたわ」と写すように、助詞「ハ」に仮名「わ」をあてることも少なくない。版本は「ぢ・じ／ず・づ」を（どのように使うかはともかくとして）使うが、写本はほぼ「じ・ず」のみで写す。版本は「古典かなづかい」を使うが、写本では表音的表記を使うことが少なくない。しかし、写本は全体的にみれば、版本をかなりな程度精密に写そうとしているとみえる。先に採りあげたように、場合によっては、版本の異体仮名をそのまま使うこともあり、また、漢字字形をかなり似せて書くこともある。先には、写本が版本を写しているかと判断した、いわば「証拠」を挙げたが、両本を対照していけば、写本が版本を写していることは「実感」できる。それだけ、両本は「近さ」を感じさせる。

写本の書き手が、自身の伎倆の範囲内において、できるだけ版本そのままに写そうとしていたのだとすれば、濁点を附けるか附けないか、「四つ仮名」も含めて「古典かなづかい」を使うか使わないかなどは、気にしていなかったことになる。つまり版本の「うたひながら」（十一オ八行目）を「うたいながら」と書いても、異なる書き方をしたとは思っていなかったということになる。そうであるとすれば、「かなづかい」ということがらも、それが「本文」の重要な要素と認識されている場合と、そうでない場合とがあることになり、そうしたことに留意していく

必要がある。この写本のかなづかいを調べて、「古典かなづかい」と一致していない、と主張しても、それは事実の報告以上の意義をおそらくもたない。その報告に意義をもたせようとするのであれば、どのようなところには「古典かなづかい」が使われ、どのようなところには使われないのかという、その「濃淡」を描くことであろう。ただし、本稿ではそこにはふみこまないことにする。

次に掲げる例18・19には注目したい。例18は版本の「雨（あめ）に濡（ぬ）れず」（十才十行目）を写本が「雨（アメニ）濡（ヌ）れず」と写した例である。現象だけみれば、助詞「ニ」を脱落させて写してしまったことに、振仮名を施す際に気づいて、助詞「ニ」も含めた振仮名を施したようにみえる。そうである可能性もある。しかし、「アメニヌレズ」は「雨濡れず」と書くことができる、そういう書き方でも充分であるという意識がなかっただろうか。助詞「ニ」は漢字「雨」「濡」に圧縮されて省かれた。あるいは「雨」に吸収されているとみることはできないだろうか。これを広義の漢文風の書き方といってもよい。

拙書『文献日本語学』（二〇〇九年、港の人刊）の第三章において、「埋め込まれる「ノ」と題して「ツチャノサブロウ」という固有名詞が漢字で「土屋三郎」と書かれた場合は、「ノ」が埋め込まれたとみ、そこからさまざまなケースについて述べた。漢字列＋漢字列の「圧力」という表現もした。そのような現象にみえる。

一六一一年に長崎で刊行されたキリシタン版『ひですの経』に「加之、物によりては当座に／用る為となり、物によりては程経て後の蓄へとなる者也。又、物によりては／身命を養ふ為となり、物によりては只慰みとなるのみ也」（二十六才六行目）と印刷された箇所がある（句読点は補った）。「物によりては」が繰り返され、最後が「物よりては」であるので、「物」の次に「に」が脱落しているとみるのが自然であろう。しかしまた、「物」に「に」が吸収されているというみかたもないではない、とも考える。例19も同様の例である。こうしたことからいうと「証明」が難しい。今後とも同様の例、またこうした現象についての情報を蓄積していきたい。

こまでで採りあげなかった例を中心にして、巻一を対照した結果を参考のために次に掲げておく。紙幅の都合

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	版本	写本	所在
古（ふる）めかしいから	境（さかひ）	見たやうに	乗（の）つて	情愿（ねがひ）	浦嶋仙人（うらしませんにん）	そなたは	はつちり	薬（くすり）はなし	生（なま）ものじり	昔堅地（むかしかたち）	吸物碗（すひものわん）	授（さずか）つただけの	借倒（かりたふ）さず	所（ところ）が	席薦一畳（たゝみいちぢやう）	席薦（タ、ミ）も一畳（イチジャウ）	処（トコロ）が	五ウ六行目
																		六オ六行目
																		六オ八行目
																		六オ八行目
																		六オ八行目
																		六ウ三行目
																		六ウ三行目
																		六ウ四行目
																		七オ一行目
																		八オ二行目
																		八オ二行目
																		八オ九行目
																		八オ十行目
																		九ウ一行目
																		九ウ四行目
																		十オ二行目
																		十オ二行目

17	おのづから	十才四行目
18	雨(あめ)に濡(ぬ)れず	十才十行目
19	日(ひ)に曝(さ)らされず	十才十行目
20	疲(つか)れず	十才十一行目
21	のみぞ遺(のこ)りける	十才三行目
22	仙人(せんにな)になりすました	十才八行目
23	至(いたり)て	十二才六行目
24	犬(いぬ)をわんくといひ	十三才十行目
25	あつかともいひ	十三才十一行目
26	暁(さとつ)て	十四才七行目
27	縫(ぬ)ひあげ	十五才一行目
28	おほくは	十六才三行目
29	無事(ぶじ)也	十六才九行目
30	類(たぐひ)	十七才四行目
31	三歳(さんさい)にして	十七才十一行目
32	五才(ごさい)	十七才十一行目
33	なほらふかと	十九才四行目
34	こちへはとらぬ	十九才七行目
35	拔参(ぬけまいり)と	十九才十一行目

おのづから	十才四行目
雨(アメニ)濡(ヌ)れず	十才十行目
日曝(ヒニサ)らされず	十才十行目
つかれず	十才十一行目
のみぞ遺(ノコ)りけり	十才三行目
仙人(センニンニ)なりすました	十才八行目
至(イタ)り	十二才六行目
犬(イヌ)をわんわといひ	十三才十行目
あつかといひ	十三才十一行目
暁(サト)りて	十四才七行目
逢(ヌ)ひあげ	十五才一行目
おゝくは	十六才三行目
無事(ブジ)なり	十六才九行目
類(ルイ)	十七才四行目
三才(サンサイ)にして	十七才十一行目
五歳	十七才十一行目
なほらふかと	十九才四行目
こちへとらぬ	十九才七行目
拔参(ヌケマイ)りと	十九才十一行目

36	果（はつ）るは	果（ハツ）つるは	十九ウ三行目
37	幻少（ようせう）より	幼少（ヨウセウ）より	十九ウ六行目
38	いとまあるときは	いまとまあるときわ	十九ウ七行目
39	稚幻（おさなき）	稚幼（ヲサナキ）	十九ウ十行目
40	乾（ほ）させ	朝乾（ホ）させ	二十ウ三行目
41	三月は節供（せつく）まへから	三月節供（セツク）まへから	二十一オ一行目
42	折（をり）そえて	折（ヲリ）もたせ	二十一オ七行目

もあるので、省いた例がある。

#### 四―四 振仮名について

写本の振仮名は、ある程度のまとまりを書いてから（場合によっては、版本の振仮名を確認することなく）施された場合があると前提する。そうすると、版本と写本とで、振仮名が異なる箇所は注目点となる。

まず「思へば」（版本五ウ四行目）や「見て」（版本五ウ九行目）のように、版本が振仮名を施していない場合がある。動詞「オモウ」「ミル」にあてた「思」「見」には振仮名が施されていないことが多い。これは版本の「判断」と思われる。こうした場合であつても、写本は振仮名を施している。したがって、写本は（版本の振仮名を写している場合は当然あるとして）つねに版本の振仮名を写しているわけではないことがわかる。

一方、版本に振仮名があるにもかかわらず写本が振仮名を施していない場合がある。版本の「ぼろ三匁（さんもんめ）」にほかふま／れいでも。麻上下（あさがみしも）は麻上下（あさがみしも）。」（五ウ九行目）を写本は「ぼ



ろ三匁（サンモンメ）／にほかふまいでも。麻上下（アサカミシモ）は麻上下。」と写している。ここでは隣接する同じ漢字列には振仮名を施していない。こうした箇所は数多くみられる。現在では、振仮名を施す場合に、同じ漢字列が繰り返して使われている場合には、最初の箇所のみに振仮名を施すということがなされることがある。そこまで徹底してはいないけれども、「発想」は似通っている。

「火面（ひづら）」（版本五オ四行目）が写本では「火面（カメン）」と写され、版本の「色紙（しきし）」（五ウ十行目）が写本に「色紙（イロカミ）」と写されるなど、版本の和語（振仮名）が写本では漢語（振仮名）とされ、版本の漢語（振仮名）が写本では和語（振仮名）とされることが少なからずある。これは、先に述べたように、写本の振仮名を施すにあたって、一つ一つ丁寧に版本の振仮名を確認していないための現象と思われる。このことをさらに考えてみれば、そのような語形が実際に存在していたかどうかはひとまずは措くとして、漢字列を挟んで、その両側に漢語と和語とがあったという「事実」あるいは、ある、という「認識」を示しているともいえよう。こう考えると、発音できる語形があつて、それを文字化する、というプロセスを通常のプロセスとみることはいうまでもないが、そうしたプロセスとは別な次元に、漢字列を置くことも考える必要があることになる。山田俊雄が「西欧的言語学における音声言語・書記言語の二つのレベルをもつてして、必ずしも論じ切るこのできない側面を、日本語が包蔵している」（一九七八年、中公新書四九四、『日本語と辞書』一六三頁）と述べた、その「論じ切るこのできない側面」を冷静に、しかも説得力のある言説として述べることは今後の課題といえよう。

写本全体において、表音的表記が優勢なことは先に述べたが、振仮名も表音的に傾くとみえる。版本の振仮名には附されていない濁点を使って、濁音音節を（積極的に）示すことはその表われの一つといえようが、版本の長音形を短呼形として示すことが少なからずある。「抹香（まつかう）」（五オ七行目）の振仮名を「マツコ」とし、「一生涯（いつせうがい）」（六ウ四行目）の振仮名を「イツシヨカイ」、「一生（いつせう）」（九ウ五行目）の振仮名を

「イツシヨ」、「大將（たいせう）」（十オ五行目）の振仮名を「タイシヨ」、「少年國（せうねんこく）」（十オ七行目）の振仮名を「シヨネンコク」「頂上（ちやうぜう）」（十一オ二行目）の振仮名を「チャウジヨ」とするなど、多くの例を見出す事ができる。写本が表音的に書かれていることからすれば、これらの短呼形は写本が書かれた明治十九年頃の発音（あるいはより慎重にいえば、写本の書き手の発音）を示していることになる。このような語形が実際に行なわれていても、文字化するに際しては、標準語形を書くということが充分に考えられ、そこに「書きことば」の「書きことばとしてのありかた」が示されているともいえよう。しかし、「はなしことば」がどのようなものであったかというのをどこまでも追及するのであれば、こうした「書きことばとしてのありかた」がどのようなものであったかという事を明らかにしていく必要がある。

また版本「槽（ろ）」（六ウ六行目）を写本が「槽（ロウ）」と写している場合や版本の「亭主（ていしゅ）」（十四オ三行目）を写本が「亭主（テイシウ）」と写している場合もあり、版本の長音形を写本が短呼形で写しているとはばかりはいえず、結局は長音形短呼形ということそのものの「揺れ」とみるべきであろう。こうした現象は「ポール表紙本」などでも観察することができ、明治期においては珍しい現象とはいえない。しかしそうはいっても、こうした例を「露出」する文献は多いとはいえない。「はなしことば」をどのように文字化しているかということも考えておかなければならないが、書き方として、文字化しにくい語形、書き手の意識として文字化されにくい語形など、さまざまな面から考えておく必要がある。

そしてまた、こうした現象を明治期に特徴的な現象とみるのか、そうではなくて、「いついかなる時でも起こり得る現象」とみるのかについては、さらに慎重に文献の観察を蓄積していく必要がある。臆測をいえば、後者であるのではないかと現時点では考える。

また「行燈（あんどう）」（十六オ八行目）の振仮名が写本で「アンドン」であること、「孝心（こうしん）」（二十五

ウ九行目」の振仮名が写本で「コンシン」とあることは、長音と撥音との交替と（少なくとも現象的には）みえる。版本の「手拭（てのごひ）」（六オ一行目）は写本の振仮名は「テヌグイ」となっており、語形が異なる。「頭（かしら）」（七オ四行目）の写本の振仮名は「アタマ」となっている。「睡（ねぶら）ざれども」（十オ十行目）の振仮名は写本では「ネム（らざれども）」であるし、「集（あつむ）れども」（十五ウ十行目）の振仮名は写本では「アツメ（れども）」であるし、「燈（ともしひ）」（十五ウ十一行目）の振仮名は写本では「トモシミ」である。これらの例は、（単純なる誤写という可能性をそれぞれにもちながら）版本とは異なる語形の振仮名が写本において施された例ということになる。

版本		写本		所在
1	火宅（くわたく）	火宅（カタク）	五オ三行目	
2	音（おと）	音（ヲト）	五オ五行目	
3	口説（つくどき）	口説（つくぜ）	五オ五行目	
4	他（ひと）の物（もの）	他（タ）の物（モノ）	五オ八行目	
5	金銭（きんせん）	金銭（キンゼン）	五オ八行目	
6	飲食（のみくひ）	飲食（ノミクイ）	五オ十行目	
7	毛唐人（けたうじん）	毛唐人（ケトウジン）	五ウ一行目	
8	初鰹（はつかつを）	初鰹（ハツガツ）	五ウ二行目	
9	街道茶漬（かいどうちやづけ）	街道茶漬（カイトウチャズケ）	五ウ二行目	

10	通る（とほ）	通（トウ）る	五ウ二行目
11	同様（どうやう）	同様（ドウヨウ）	五ウ三行目
12	赤裸（まつはたか）	赤裸（アカハタカ）	五ウ八行目
13	帯（おび）	帯（ヲビ）	五ウ十一行目
14	女（をんな）	女（オンナ）	六オ一行目
15	事	事（コト）	六オ一行目
16	物羨み（ものうら）	物羨（モノウラヤ）み	六オ三行目
17	畢竟（ひつきやう）	畢竟（ヒツキウ）	六オ六行目
18	整る（とゝのふ）	整（トトノウ）る	六オ七行目
19	青表紙（あをひやうし）	青表紙（アヲヒヨシ）	六オ九行目
20	風流（ふり）	風流（フウリウ）	六オ九行目
21	天道（てんとう）	天道（テンドウ）	六オ十行目
22	金（かね）	金	六オ十行目
23	多（おほ）く	多（ヲ、）く	六オ十一行目
24	下直（げちき）	下直（ゲジキ）	六ウ二行目
25	夢想兵衛（むさうひやうゑ）	夢想兵衛（ムソウヒヤウエ）	六ウ四行目
26	青海原（あをうなばら）	青海原（アヲウミバラ）	六ウ八行目
27	理（ことわり）	理（コトハリ）	七オ八行目
28	楫（かぢ）	楫（カジ）	七ウ九行目

29	他（ひと）の為（ため）	他（シト）の為	九ウ八行目
30	少年國（しょうねんこく）	少年國（シヨネンコク）	十ウ四行目
31	もち出（いだ）し	も（モ）ち出（イダ）し	十ウ九行目
32	待折（まつをり）から	待折（マチヲリ）から	十ウ十行目
33	短（みぢか）かりし糸（いと）	短（ミジカ）じかりし糸	十一オ一行目
34	ぞよくと	ぞわ（ヨ）くと	十一ウ一行目
35	僅（はづか）に	僅（ハズカ）に	十一ウ一行目
36	水子村（みづこむら）には	水子村（ミズゴムラ）には	十二オ六行目
37	爺々命（とゝのみこと）	爺々命（ト、ノカミ）	十二オ七行目
38	分身（ふんじん）して	分身（ブンシン）して	十二オ十一行目
39	拭（のぐ）ふ	拭（ノグ）ふ	十四オ九行目
40	不教嶋（をしえずしま）	不教嶋（フキヨシマ）	十四オ十行目
41	迷子札（まよひこふだ）	迷子札（マヨイゴフタ）	十五ウ一行目
42	小判形（こばんなり）	小判形（コバンカタ）	十五ウ二行目
43	四方（しほう）	四方（ヨホウ）	十五ウ二行目
44	忘（わす）れて	忘（ハス）れて	十五ウ八行目
45	人形（にんぎやう）の	人形（ニンギヨ）の	十六オ一行目
46	障子（せうじ）を	障子（シヨジ）を	十六オ八行目
47	そら泣（なき）を	そら泣（ナキ）きを	十六オ十行目



48	臀（しりこぶた）を	十六ウ一行目
49	管領（かんれう）し	十六ウ四行目
50	両親（りやうしん）	十六ウ五行目
51	着（き）たるまゝで	十七オ六行目
52	いにしへの人	十七ウ十行目
53	吭（のど）をならして	十八オ九行目
54	大根（だいこ）	十八ウ八行目
55	辻（すべつ）て	十八ウ九行目
56	主（しゆう）に	十九オ四行目
57	買出（かひだ）しは	十九オ六行目
58	わる業（ごう）が	十九オ十一行目
59	讀書算筆（とくしよさんひつ）	十九ウ六行目
60	天晴（あつはれ）	二十オ二行目
61	髪（かみ）の結（ゆひ）やう	二十ウ十行目
62	貧乏樽（びんぼうたる）	二十一ウ三行目
63	横領（わうれう）せらるゝ	二十三ウ三行目
64	店（たな）がえ	二十三ウ十一行目
65	両親（りやうしん）	二十四オ二行目
66	尊敬（そんきやう）	二十四オ二行目
	臀（シリブタ）を	
	管領（カンリヨ）し	
	両親（リヨシン）	
	着（キタル）まゝで	
	いにしへの人（シト）	
	吭（ノゾ）をならして	
	大根（ダイコン）	
	辻（スデツ）て	
	主（シユ）に	
	買出（カイタシ）しは	
	わる業（ギヨ）が	
	讀書算筆（ヨミカキサンビツ）	
	天晴（アツバレ）	
	髪（カミ）の結（ユウ）やう	
	貧乏樽（ピンボダル）	
	横領（ヨ、リヨ）せらるゝ	
	店（ミセ）がえ	
	両親（リヨシン）	
	尊敬（ソンキヨ）	

67 人気(じんき)  
教(をしゆ)れば

人気(ニンキ)  
教(ヲシエ)れば

二十四オ六行目  
二十六オ二行目

右で採りあげた以外にも、さまざまに興味深い例があるが、紙幅の都合もあるので、参考のために、ここまでで採りあげられなかった卷之一の例の幾つかを挙げておく。例の所在は版本の丁数と行数とで示す。

## おわりに

本稿では、江戸期に出版された版本を明治期に写した写本を採りあげた。文学研究においては、このような写本は一顧だにされないともいえよう。しかし日本語の観察ということにおいては興味深い文献といえよう。大枠としていえば、江戸期の日本語も明治期の日本語も近代語といつてよい。その近代語の中においても、さまざまな変化がある。そうしたことをはつきりとしたかたちで窺うことができる点でまず興味深い。さらにいえば、さまざまな面において、過去の言語システムを検証する手がかりも与える場合があると考ええる。今後とも「明治の写本」に注目していきたい。

## 註

(1) ただし、言語と切り離して、文字化の手段のみを考えることに積極的な意義を認めるというような別の考え方があることは予想される。稿者は、(いささか抽象的なモデルではあるが)「言語」にかたちを与えるために、「音声化」と「文字化」という二つの方法があるというモデルを考えている。「音声化」された言語が「音声言語」で、「文字化」された言語が「文字言語」である。そして「文字言語」が成り立つプロセスには何らかのかたちで「音声言語」がかかわっていると考えている。具体的な「音声言語」や「文字言語」をとおしてしか、ここという「言語」がとらえられないという点で「抽象的なモデル」

であると考えるが、それでも、「言語」というものがあつて、それにかたちを与えるというプロセスが想定できるのであれば、「文字化」ということがらのみを論ずことは難しいと考える。

## Books Reproduced in the Meiji Period

KONNO Shinji

**Abstract** A textbook that was published in the Edo Period was reproduced in the Meiji Period. This type of textbook is not generally considered as valuable in the field of literature research. However, in some cases, it can be accepted as a valid resource material in the field of linguistics. The Japanese language has changed over the years from the Edo Period to the Meiji Period. Such a process of change can be seen by comparing the textbook published in the Edo Period with the textbooks reproduced in the Meiji Period. From the contrast examined in this paper, with regards to whether the prolonged sound was recognized or not in the Meiji Period, it was pointed out that the word form may have been deviated. Moreover, it was also found that there may have a deviation in the special syllables such as the geminated consonant and the syllabic nasal. Furthermore, in order to indicate the inflectional form of the subjective case and the objective case, differences in whether the particle has been used or not can be found in both textbooks, however, it was concluded that such a condition constantly exists in the Japanese language.

**Key words:** published books, reproduced books, wavering of word forms